



TITLE:

愛しの「物性研究」(<特集>「物性研究」と私の思い出)

AUTHOR(S):

蔵本, 由紀

---

CITATION:

蔵本, 由紀. 愛しの「物性研究」(<特集>「物性研究」と私の思い出). 物性研究 2012, 97(6): 1209-1210

ISSUE DATE:

2012-03-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/172065>

RIGHT:

## 愛しの「物性研究」

蔵本 由紀

研究者の卵だった 1960 年代の後半から 70 年代のはじめ頃の私にとって、「物性研究」誌は研究生活の中でとても大きな存在だった。当時の同誌には非常に質の高い記事が多かった。たとえば久保亮五の「統計力学講義ノート」。これは 64 年の秋に東大の院生向けの連続講義を久保先生のお弟子さんたちがまとめられ、64 年 12 号から 65 年 5 号にかけて連載されたものだが、私にとっても当時の京大物性理論の仲間たちにとっても、この講義録はかけがえのない貴重なテキストで、統計物理を志す学生は多くのことをここから学んだ。ちなみに、この記憶がかなり強烈だったこともあり、私自身も初学者が繰返し愛読するような講義ノートをいつか「物性研究」に書きたいとの思いをひそかにいっていた。それで、20 年以上経た後に研究室でのセミナーで講義した内容を院生にノートしてもらったものを試みに「動的縮約の構造」と題して同誌に掲載させてもらったのだが、如何せん久保講義ノートには及びもつかないお粗末なものになってしまった。

現在でもそうだが、大学院の理論研究室に入った学生にとって自力で英語論文を書いて国際誌に投稿することはかなり高い壁である。この壁を越せないままに終わってしまう学生が少なからずいるのは残念である。それは指導者の責任でもあるのだが、私の大学院時代にはありがたいことにこれを越えるための踏み台ともいべきものが別にあった。それは和文論文を「物性研究」に投稿することである。一人前の研究者になる前段階としてこのステップはたいへん有効で、しかも現在に比べて圧倒的に情報の少ない当時、物性理論の名だたる先生方が同誌に載った若手研究者の論文に少なからず関心を寄せておられたことも我々にとって大きな励みとなっていた。和文論文は研究業績としてカウントされないなどという世知辛い考えはほとんどなかった。学振の奨学金や研究職にありつけるかどうかは気にならないわけではなかったが、何よりも研究者として力をつけて尊敬する先生方の注目を少しでも惹くようになりたいという思いが我々を駆り立てていた。

私自身もこの中間的ステップを利用した学生の一人である。D1の年の冬だったと思うが、「揺らぎの非線型効果」と題した、今にして思えばすごくつまらない内容の和文論文を「物性研究」に投稿した。後年「非線形科学」の道に入ることになるなど夢にも思わず「非線型」がはじめての論文に現れたのも多少因縁めいているが、そのことは別にして、これを投稿した前後のごく些細な記憶をなぜかしきりに思い出す。当時「物性研究」の編集長は松田博嗣先生だったと思う。私の原稿はその月の締切り日を1日か2日オーバーしていたので、心配して編集室に電話して「僕の原稿間に合いますか」と問い合わせたところ、編集委員でもあり私の3年先輩でもあった米沢富美子さんが現れて、(多分その場にいた編集長の了解で)「特別に認めてあげます」と多少冗談めかして返答された。私は「はっ、ありがとうございます」とか何とか、かしこまって答えた。ペンをとるよりキーをたたくことのほうが圧倒的に多い今の時代からはほとんど想像できないことかもしれないが、自分の書いたものが活字になるということが当時はわくわくするほどの一大事だったのである。

当時の「物性研究」のように肩肘張らないで研究者が母国語で互いに刺激しあえるような印刷物が現在は見当たらない。ちなみに物理学会誌の記事はそう気軽には書けない。そもそも印刷が美し過ぎる。学問的な質を保ちながらネット上でそのようなフォーラムを実現することもなかなか難しいだろう。あるいは、もはやかつての「物性研究」が果たしたような役割は必要のない時代になっているのかもしれない。若い世代にぜひ聞いてみたいことの一つである。